

## 岩手県野田村の支援活動報告（2011年4月18日）

ボランティアセンター事務局・人文学部・飯孝行

前週に引き続いて、ボランティアセンターで野田村災害支援ボランティア第2回が実施されました。参加者はバスの定員一杯の53名（学生36名、教員5名、社会人枠11名（学生2名を含む）、記者1名）で、男女比は男性36名、女性17名でした。1回目同様、遅刻者はおらず、ほぼ定刻に出発できました。ボランティア募集は、人文学部教員とスポネット弘前のルートにほぼ限られており、1回目の参加者の口コミ効果が大きかったようです。



補助席まですべて一杯のバス車内



車窓から見える野田村の瓦礫の山

快晴の野田村に到着後、おおむね10人前後の班に分かれて、被災者宅の瓦礫撤去や側溝の清掃が行われました。床下の汚泥撤去にあたった3人の班もありました。今回は、班分けの際、学生と社会人の双方が同じ班になるように工夫がなされました。女性ボランティアの仕事は、前は体育館内での支援物資の仕分け（被災者の要望に応じた物資の抽出）と被災者宅清掃でしたが、今回は男性と同じく屋外での瓦礫撤去作業などになりました。



役場そばの公道の側溝清掃作業の様子



被災者宅の瓦礫撤去の様子

野田村の沿岸付近の風景は、前回とおおむね変わりなかったものの、積まれていた瓦礫の山が撤去され、壊れかけの家屋がブルドーザーで破壊されるなど、少しずつではありますが復興の兆しは感じられました。私の所属した班では、川沿いの被災家屋（1階の天井付近まで津波で洗われた跡あり）の周辺の瓦礫撤去に9人であたりました。作業開始の際、家主の方からは「一日かかっても片付かないと思う」と言われましたが、昼過ぎには8割方の撤去が終わり、「あとは自分で何とかできそうだ」と大変喜ばれていました。

昼休憩を挟んで、午後は、異なる被災者宅へ赴いて、別の班の畑の瓦礫撤去作業に合流しました。朝のうちは石や瓦礫が積み重なっていたという地表は、すっかり見えるまでになりました。私たちが去る際に、家主の方は何度も頭を下げて感謝しておられました。



社会人参加者の神さんと家主の方



バス車内での李先生のまとめの言葉

今回は、学生、教員、社会人が同じ班の中で協働した結果、前回よりも相互交流が深まったように見受けられました。被災者宅で家主と会話を交わす班も多かったようです。また、女性参加者は屋外の仕事で大変と思われましたが、瓦礫は思っていたより重くなかった、屋外の方が開放的だし良い運動になった、といった肯定的な声が多く聞かれました。

帰りのバス車内では、参加者からボランティア作業に従事した感想が語られました。瓦礫に大きな石が混じっていて津波の破壊力をあらためて実感した、良いことをしたというよりも楽しかった、写真などの思い出の品を掘り当てるのは重機ではなく人の手でなくてはできない、被災者は自分たちより大変なのに親切にしてくれた、自己満足で終わらせずに可能な時に支援を続けたい、といった学生の声の数々に触れて、社会人も、若い人たちの熱気に元気づけられた、と語っていました。引き続いて、李センター長より弘前大学による野田村の継続支援の必要性などが熱く語られるうちに、バスは弘前に到着しました。

成し遂げていることはいまだ小さいかもしれませんが、弘前大学の野田村支援ボランティアは、支援自体はもとより、参加者が被災現場で震災の恐ろしさを目の当たりにし、老若男女の参加者同士で協働し、被災者と交流することに醍醐味があり、ボランティアが、支援のみでなく、相互交流をはかり、自己研さんをはかる場にもなっているように思われました。第2回は、参加者の多くとリーダーの李先生の「熱さ」に尻込みする人が出ないかと心配されるほどで、第1回よりもいっそう成功裏に終わったと言って良いでしょう。

(人文学部教員 飯考行 記)